



ゆきとどかない人

— 子供のけがに關して —

倉 橋 惣 三

本号には、編集部からお願ひして、平井先生に、子供のけがの応急手当のことを書いていたゞいてゐる。けがは、偶然のことに相違ないが、幼稚園では必ずしも稀でない。そのとき、すぐ、適當の手当をすることは、先生方のおこたつてならない必要である。そのための常備薬さえない幼稚園は、大切な多勢の子供を預つてゐる場所として、いわば怠慢の至りである。若し、常備薬が、いつか備えたまゝで、瓶はあれども液が無くなつていたり、袋はあれども粉が空になつていたり、備えた筈だが仕舞い忘れていたりでは、急に間にあわない。急の間にあわなければ、全然間に合わないと同前である。

応急手当の仕方については、平井先生の教えに従うとして、そういう必要のないように、前から、ふだんから氣を配つておく必要がある。そして、これは、家庭では親、幼稚園では先生の任務である。幼児がけがをすると、お前さんが氣をつ

けないからだと叱られるのでは、その通り御尤もではあるがわれ／＼は同じ言葉を、先生に献上したい。

子供にけがをさせない秘訣は、子供をじつと戸棚に入れておくに限る。が、それでは、自發活動まで戸棚の中で腐つて仕舞うというところで、保育精神のある先生はそんなことをしない。遊べ／＼自由に、活潑に、ちゆうちよすることなく、どし／＼遊びなさいと、モーションをかける。但し、けがはしないようにね、と附けたして。

特別の白痴を除いては、けがを多くするのは、元氣な子である、——と同時に、子供に多くけがをさせる先生は、めはし、こゝろの動きの、ゆきとどかない人である。

深い保育のこゝろはもつていても、日々のこまかいことになんとまあ、とんとゆきとどかない先生が、案外あるのでないでしようか。大きな鉄、よく切れるナイフを、机の上に出

しばなしにして、チョット、外へ出る先生（長くではないのですが）遊園の敷石の中に、とがつた石ころがあるのを、そのまゝ大切に保存しておく先生、水のはいつている大きなカメを、この中に落ちるとあぶないですよと、反対暗示まで御丁寧に与えて、蓋をしないでいる風流な先生。——例を挙げていけばきりがない程、ゆきとどかない先生が失礼ながら、そこらにいらつしやいませんか。

口でいうことは、よくお氣がつかれるが、そらあぶない、そらけがをするよ、と、先生お目がおありですか、といふたくなる。目は此通り二つありますが、ついつかりしているといわれると、こつちでも、御尤もで、毎日お忙しくて、お疲れでいらつしやるからと、それでも御挨拶するよりほかない。が、こうして、子供のけがの原因は、先生にあることを断言（？）せずにはいられない。——幼稚園のけがの原因は子供になくて先生にある——殊に、それが屢々慢性的であるのは困る。——時とすると子供のけがは、あの先生の組にきまつているといつた人がある。——そして、その組に限つて、常備薬が、品切れになつているかもしれない。先生のゆきとどく心がカラなのだから、それも当然のことかも知れない。

けがをするたびに、子供が注意深くなる。教育効果があるという名説がある。しかし、けがをするたびに、用心深くなり、臆病になり、活気がなくなり、年寄りになるといふ、理論もある。どつちにしても、うんと元気に遊んでも、けがの

原因をなす伏兵のいないところこそ、子供、殊に親が、安心して子供を通わせることのできる幼稚園である。そして、その伏兵掃蕩の任は、一つに先生のゆきとどく心——目——のほかにはない。

けがなどは小さい問題だ。保育上の大問題ではないという卓説が出たり、筆者は大反対である。幼稚園は、何よりも先づ、幼児のための安全地域である。教育にはゆきとどかないと、だらけで申訳ないが、お子さんをマーキユロだらけや、バンソウ膏だらけにして家へ帰しては、誰れが幼稚園に安心せんやである。だいな子供が一つけがをしたら、その先生にも一つけがをさせたい位に、筆者は憤慨する。それが、余り乱暴（？）なら、当分赤い色の消えないマーキユロや、なか／＼はがれないバンソウ膏で、その先生の白い柔い肌を罰点をつけたいとも思う。冗談ではない。先生の責任のせめてものしるしとしてである。

正 誤

本誌第九号（九月号）巻頭の主幹論文中第二ページの『近時、国公立幼稚園保育所の……』は、『国公立幼稚園保育所の……』の誤植であり、『私』の文字の脱落していたことを訂正します。